

# 広島市立大学開学 20 周年記念 学生平和論文コンテスト 受賞論文と講評

平成 26 年 11 月 1 日  
広島市立大学学生平和論文コンテスト実施委員会  
委員長 吉川元

広島市立大学開学 20 周年を記念して、平和の諸問題を考察し、その解決策を提案する学生論文コンテストを行った。

論文のテーマとして①広島と平和、②科学技術と平和、③芸術と平和、のいずれかを選択させ、論文の字数は 4,000 字から 5,000 字の小論文を募集した。応募資格は大学・大学院修士課程に在籍する学生で、国内部門（日本語を母語とする者）、および海外部門（日本語以外の言語を母語とする者）、の二部門に分けた。

応募論文総数（平成 26 年 8 月 20 日締切り）は、国内部門 29 編、海外部門 14 編、合計 43 編であった。国内部門では、国内 12 大学、海外 2 大学（英国、中国）の学生からの応募があり、海外部門では、国内 2 大学、および中国、インド、ニュージーランド、イタリアの 9 大学の学生からの応募があった。

厳正な審査を行った結果、受賞対象論文として、

国内部門：最優秀賞 1 編、優秀賞 2 編、佳作 1 編

海外部門：優秀賞（特別賞）1 編、佳作 2 編

を選んだ。

## 国内部門

### **最優秀賞** 鍋島唯衣（広島市立大学大学院）

「被爆再現人形は何を伝えてきたのか—被爆再現人形撤去を巡る論争を手がかりに—」

本論文は、被爆再現人形の展示撤去の問題を切り口に、被爆の「実相」とは何か、「実相」を伝えるとはどういうことなのか、という難解なテーマに挑戦する優秀な論文である。その分析手法は秀逸であり、被爆体験の継承をめぐる議論に一石を投じる時宜にかなう論文である。

### **優秀賞** 藤高リリ（東京大学大学院）

「ヒロシマが紡ぐ「地」と「知」の連帯—「国際平和文化都市」としての広島  
の責任—」

本論文は、平和宣言の内容を「連帯」をキーワードに、他者への共感に基づく「地」の連帯と「知」の連帯の手法を模索する。「ヒロシマ」、および被爆体験を世界に普及させるにはどうしたらよいかという理論枠組みを提示し、核廃絶の手法を考える上で、手掛かりを与えてくれる優秀な論文である。

**優秀賞** 南茂芽育（立命館大学）

「平和学習に必要な5つの視点—これからの世代が‘考える’平和学習とは—」

本論文は、著者自身の平和学習の体験を通じて、常識を疑う、被爆者の声を聴く、グローバル被爆者への理解、誰と学ぶか（異なる意見への傾聴）、今何ができるか、以上5つの視点から、平和学習の効果的手法を提案した力作である。

**佳作** 石原遥（東京大学大学院）

「政治を問いかける市民と芸術—台湾ヒマワリ学生運動から見えたもの」

本論文は、芸術と政治の関連、なかでも芸術が政治参加を促す上で重要な役割を果たすという古典的な問いかけに、台湾のヒマワリ学生運動を題材に現地取材をもとに書かれた論文である。政治と芸術の関連を問うユニークな論文である。

海外部門

**最優秀賞** 該当者なし

**優秀賞（特別賞）** Sin Etu（首都師範大学、中国）

「白マントと緑帽子の老紳士」

本論文は、広島を記憶を想起させることの重要性を説き、科学技術、人間の倫理を問う傑作である。語彙、表現力はともに豊かで、戯曲としてヒロシマを描く手法は秀逸である。通常の論文の形式をとっていないことが難点で、よって優秀賞（特別賞）に選定した。

**佳作** Du Xiaojun（中国人民大学、中国）

「日中関係とベクトル計算—答えを0ベクトルにする計算方法—」

ベクトルの比喻で、アンケート調査の資料をもとに日中間の負の相互のイメージを描く興味深い論文である。負のイメージを正し、日中関係の改善を射程に入れた力作であるが、中国側の視点に偏った歴史解釈が散見される。平和との関連は少し薄い、中国の対日イメージを理解する上で、佳作に値する論文。

**佳作** Tran Thanh Loan（立命館アジア太平洋大学）

「未来平和のための科学技術」

科学技術の進歩が戦争の甚大な被害をもたらし、しかも非人道的なものにした歴史を、ベトナム戦争における化学兵器の使用と、広島原爆投下とその被害を重ね合わせて論じる。科学技術を平和目的に使用することの重要性を訴える力作である。

以上